

新型コロナウイルス感染症 学校への影響

横浜医療センター附属横浜看護学校

福田 優子

我々専門学校では国家試験終了後、教育と臨床との乖離を埋めるべく、現場に近い技術の複合演習を行っている。昨年度は新人看護師が多数離職したこともあり、周到に準備していた。しかし、2月28日のNHO本部の通達により演習・卒業講演・謝恩会を中止した。卒業式については、学校長の計らいにより、密にならない工夫の上、証書の授与と学校長からの饒の言葉で無事送り出すことができた。

新年度、始業式と入学許可の2日間の登校により、学生に医療従事者の一員として自律した行動をとるよう意識付けできた。以降自宅学習にし、4月は毎日担任から電話による状況確認、郵送による課題で講義を進めた。一向に減らない感染者数から遠隔授業の導入の必要性を感じたが、授業料の安い専門学校では、ITの整備が不十分である。導入を判断するため学生の遠隔授業の要件を調査した。想像以上にネット回線は整っており、ほとんどの学生がデータ制限のない契約であった。ICT機器に関して保有率は100%、PC保持率は1年生だけが低かったが、調査後購入した学生も増えた。Web会議システムの選択は、「90分間対面であること」を条件にした。教員は勤務時間外にも試してcisco webexとzoomに決定した。問題は学校側の乏しいネット環境で1クラス80名の授業を同時に2学年で行うことだった。4月に40名のホームルームから開始し、5月7日から本格的に授業を開始した。「ある大学でアクセスが集中し授業に参加できない学生多数」というニュースから、万々に備えビデオ撮影も開始し

た。初めて2つの学年が重なるときは集中を避けるために、一方を教員の自宅から配信した。講師陣も遠隔授業に協力してくださり、1日3～4コマを3週間遠隔授業で行うことが出来た。5月末から学年ごと隔日登校をはじめ、6月16日から初めて全学生が登校した。

また、教員の在宅勤務も試行し、無駄な通勤時間を省いて成果を上げる働き方も学んだ。

学校の最大の問題は実習であった。当校は横浜医療センター附属の学校であり、他に県内の4つのNHO病院で実習している。5月末からの実習は自施設と他1つの病院、訪問看護ステーション、保育園に限られた。通常6時間を臨地で学習するが、「2時間行ければ幸い」と考え、2・3人の学生を2時間交替のシフトを組んだ。さらに新型コロナウイルスの影響で病院全体の患者数が減っていることもあり、受け持てる患者が少ない。小児看護学実習では受け持てる小児が1名という危機的状況になったため、教員の子ども数名が演習に協力してくれた。改めて「実習時間は全て臨地で学ばなければならない」という、実習施設に困らない恵まれた学校の安易な考え方であったことを知ると共に、自分のリスク管理の甘さを反省した。

感染者を多数受け入れながら、或いは感染者を出すことが出来ない状況で実習を受け入れて下さった施設、学生を受け入れようと最後まで頑張って下さった施設の院長・看護部長に感謝申し上げたい。

この5か月の経験は、自分の、或いは組織の古き価値観を変え、「当たり前を疑う」ことを教えてくれた。そして置かれた状況下でその時々対象にとっての最善を考え、柔軟に対応する能力、まさに我々が臨床で培った力がこんな時こそ役に立つ。

多くの患者を受け入れながらも学校教育に積極的に寛大な学校長、柔軟性と創造性豊かな教員の力で第1波を乗り越えることが出来そうである。学生と保護者の協力にも感謝したい。次の感染症と勇敢に戦える看護師を育成するため、こうして目の前に学生が居ることに感謝しながら教壇に立ち続けていきたい。